## 2-2　氣の生成論──老荘思想と王夫之の宇宙観

第1章では、太極から始まり、陰陽、そして五行へと展開される氣の構造を見てきました。これらは、自然の仕組みや空間の整え方を考えるうえで欠かせない、“設計の型”とでも言うべき原理です。

しかし、太極や陰陽、五行が単なる図式や法則として抽象的に存在しているわけではありません。太極が動き出し、陰と陽が転じ、五行が循環していくためには、その背後にある“何か”が必要です。

その“何か”こそが「氣（き）」です。

氣とは、目には見えませんが、あらゆる動きを支える根源の力です。

この氣があるからこそ、自然は流れを持ち、空間は変化し、私たちの身体も心も日々動き続けるのです。風水とは、この氣の流れや滞りを読み取り、空間の中に息づく“生命の呼吸”を整える技術であるといえるでしょう。

では、この氣とは一体どのような存在なのでしょうか。

いつから、どのように存在しており、宇宙や自然とどのように関係しているのでしょうか。

古代の思想家たちは、この氣の本質をどのように捉えていたのでしょうか。

ここからは、氣の成り立ちと本質を探るために、古代中国思想における「天地人一氣（てんちじんいっき）」という基本理念、そして老子・荘子・王夫之という思想家たちが描いた宇宙と氣の構造をひもといていきます。

1．天地人一氣──氣は宇宙を貫く“つながり”

風水で扱う「氣（き）」とは、目に見えるものではありません。

しかし、その氣が存在するかどうかによって、空間の雰囲気や人の体調、さらには物事の流れまでもが大きく変わる──それが風水の基本的な発想です。

では、氣とは一体何なのでしょうか。それは「ある」とも「ない」とも断定しにくい存在です。

けれども、確かに感じられる。まるで空気のように。

空気もまた目には見えませんが、その存在を疑う人はいません。

息を吸えば肺が膨らみ、風が吹けば木々がそよぐ。

見えないからといって、存在しないとは言えないのです。

氣もまた、そのように世界に満ちている“見えざる力”のひとつです。

古代中国の思想では、この氣を「天（てん）」「地（ち）」「人（じん）」の三者に共通する存在と考えていました。

それが「天地人一氣（てんちじんいっき）」という思想です。

天にある氣、地にある氣、そして人が持つ氣──これらは本来、別々のものではなく、すべてがひとつの氣に由来し、互いに響き合いながら存在していると考えられていたのです。

これは単なる比喩ではありません。

実際、人間は天候や地形、土地の氣に大きな影響を受けており、心身の調子も変化します。

逆に、人の氣が乱れれば、空間全体の氣も乱れるのです。

つまり、天・地・人は氣によって結ばれた一体の存在であり、互いに連動し合っているのです。

この「天地人一氣」の思想は、風水の根幹を成すばかりでなく、東洋医学や気功、建築、芸術といった分野にも深く根ざしています。

自然とともに生きるとは、言い換えれば、氣とともに生きることを意味しているのです。

では、この氣はどこから来たのでしょうか。

宇宙が生まれる以前から存在していたのでしょうか。

あるいは、宇宙が誕生した瞬間に現れたのでしょうか。

古代の哲学者たちは、それぞれ独自の視点からこの問いに挑みました。

ここから先は、氣という存在の根源に迫るために、まずは老子と荘子──すなわち道家の思想における氣の理解をたどっていきます。

その後、「氣こそが宇宙の実体である」と喝破した哲学者・王夫之の壮大な宇宙観へと進んでいきます。

２．老子の宇宙生成論──道・無・有・氣・万物

古代中国の哲学において、「氣（き）」は唐突に語られたものではありません。

その前提には、「道（タオ）」という根本的な原理が据えられていました。

風水の思想もまた、この「道」に始まる宇宙観を基盤として築かれているのです。

老子は、その著作『道徳経』の第一章で次のように述べています。

道可道、非常道。名可名、非常名。

無名天地之始、有名萬物之母。

「道として語ることができる“道”は、本当の道ではない。

名として呼ぶことができる“名”は、本当の名ではない。

“無”は天地の始まり、“有”は万物の母である。」

老子にとって、宇宙のすべての始まりにあるのは「道（タオ）」です。

この道（タオ）は、名前を与えることも、把握することもできない、形のない根源的な存在です。

しかし、その道（タオ）から“無”が生まれ、さらに“有”が現れ、陰陽と五行の氣を通じて万物が展開していくのです。

この宇宙の生成プロセスは、後の道家思想や風水理論において、次のような順序で体系化されました：

道 → 無 → 有 → 氣 → 陰陽 → 五行 → 万物

道（タオ）は静かで、不動で、形も音もなく、ただ存在しているだけのものです。

しかし、あるときその道（タオ）がふるえ、動き始めた──それが“無”の誕生を意味しています。

“無”とは「何も存在しないこと」ではありません。

それは、まだ名前も形も持たない、けれども確かに“動きの兆し”として存在する何かです。

その“無”の動きが、やがて“有”を生み出します。

ここでいう“有”は、単なる物質ではなく、氣が生まれ、秩序をもって流れ出す段階──すなわち“秩序ある運動”としての現象の始まりなのです。

氣は、この“有”の内部に宿っています。

それは“有”の一部であり、“有”を支える力であり、“有”の中を貫いて流れる存在です。

氣こそが、道（タオ）が最初に姿を現したかたち──その原初の現象と言えるのです。

老子はこのように、道（タオ）から始まる宇宙の展開を「無為自然」という言葉で表現しました。

ここでいう“無為”とは、「何もしないこと」ではありません。

人為的な操作を加えることなく、氣の流れに逆らわず、自然のままに、道に従って生きる姿勢を指します。

まさにここに、風水思想の根幹が据えられているのです。

自然の氣の流れに逆らわず、むしろその流れを丁寧に読み解く。

人為によって空間を無理に変えるのではなく、氣の通り道を見きわめ、それを活かす。

これこそが、老子の道（タオ）の思想に基づいた風水の原点なのです。

老子はまた、次のようにも語っています。

「人法地、地法天、天法道、道法自然」

人は大地に従い、大地は天に従い、天は道（タオ）に従い、道は自然に従う──

このように、すべての存在は、より大きな秩序に導かれて存在しているのです。

そして、その秩序を支えているのが「氣」であり、氣のゆらぎが宇宙のリズムを創り出していることを、老子は深く感じ取っていたのです。

このように、老子にとって「氣」とは、道（タオ）の運動によって生まれた、宇宙全体を貫く“秩序あるうねり”なのです。

氣は目には見えませんが、自然界のあらゆるところに満ちています。

空を見れば風が吹き、雲が流れ、地上を見れば水が動き、草木が揺れています。

氣は確かに私たちの廻りに存在しています。

しかし、それは単に「そこにある」だけのものではありません。

氣は物質でもなく、ただのエネルギーでもありません。

氣とは、存在と存在の間に働く関係性であり、あらゆる動きを生み出す“ゆらぎ”そのものなのです。

老子のこの哲学は、後に荘子によってさらに深められ、やがては多くの風水家たちの手によって、空間や地形の解析に応用されていくようになりました。

風水は、単なる環境の整備ではありません。

それは、老子が説いた「道」と「氣」の原理を、空間に応用する哲学なのです。

3.荘子の世界観──氣と自然の自由な共鳴

老子が「道と氣によって万物が生まれる」と説いたのに対し、荘子は「生まれた万物が、どう氣とともに生きるか」を見つめた思想家です。

荘子にとって、この世界は、固定された形や法則によって成り立っているものではありません。

むしろ、すべては常に変化し、流れ、巡り合い、そして離れていく──このような流動性こそが、宇宙の本質であると考えました。

氣とは、そうした変化と流れをつなぐ“見えない糸”のような存在です。

それは秩序ではなく、自由であり、決まりではなく、ゆらぎなのです。

▍氣とは「こだわりのない流れ」である

荘子の思想には、しばしば「無用の用」という表現が登場します。

一見役に立たないように思えるものこそが、実は最も大切な働きをしているという意味です。

たとえば、大木は材木として使えないほど節くれ立っているために切られず、かえって長く生き残る。

また、小さな穴のあいた甕（かめ）は水を汲むことはできませんが、香りをためるにはちょうどよい──このように、役に立たないように見えるものが、実は氣の本質を体現しています。

氣は、目に見える「便利さ」や「効率」ではなく、もっと根源的な次元で、物事を自然な形へと整えていきます。

ただそこにあるだけで、流れが変わり、気分が変わり、空気そのものが変わっていく。

それは“存在している”というより、“共鳴している”といった方がふさわしいかもしれません。

荘子は、こうした氣のあり方を「逍遥（しょうよう）」と呼びました。

どこまでも自由に遊び歩くこと──空や風や氣と一体になって、自然の中を生きる境地です。

▍荘子における「渾沌」と「一気」

また荘子は、「渾沌（こんとん）」という存在について語っています。

それは、人と自然、天と地、物と物の境界がすべて溶け合い、区別が存在しない“混沌”の状態を指しています。

荘子は、賢人である「南伯子」と「北伯子」が、渾沌に穴を開けて目や鼻を作ろうとした結果、渾沌が死んでしまったという寓話を伝えています。

この寓話は、「氣とは、無理に形を与えようとすれば壊れてしまう」という教訓を含んでいます。

氣は本来、名づけられず、形を持たず、自由に流れるものです。

それを人為の枠にはめ込もうとすると、氣は死に、生命力を失ってしまうのです。

荘子が説いたのは、氣を“制御する”のではなく、“響き合う”という生き方です。

人と自然の間には氣という一本の糸が通っており、それを感じ取り、共鳴することで、真に自然と調和した存在になれると考えました。

▍風水と荘子──氣と“場”の共鳴

荘子の思想は、直接的に風水術を説いたものではありません。

しかし、「氣と自由に響き合う」という発想は、風水における「氣場（きば）」の捉え方と深く関係しています。

風水では、家や土地の形状に過剰にこだわるのではなく、そこに氣がどのように流れ、どのように溜まり、どのように開放されるかを重視します。

これは、荘子が説いた「こだわりを捨て、流れに乗る」姿勢と本質的に一致しています。

また、荘子が語った「逍遥遊」という境地は、風水において「気持ちよく過ごせる空間」として具現化されます。

“整っているけれど整えすぎていない”、“静かだけれど息苦しくない”──そのような空間には、自然に氣が巡っているのです。

それはまさに、荘子が好んだ「大きくて何もない場所」や「風が通り抜けるような場」そのものです。

荘子にとって、氣は「制御する対象」ではなく、「共に舞う存在」でした。

道とともに在ること。氣とともに生きること。

それは、老子が説いた「道の運動」に対する、もう一つの氣の在り方なのです。

次節では、この老荘思想とは異なる視点から、「氣こそが宇宙そのものである」と明言した思想家──明末清初の哲学者・王夫之の思想世界を探っていきます。

4.王夫之──氣こそ宇宙の本体

老子と荘子が「道」や「氣」を自然との調和という観点から捉えたのに対し、17世紀の中国に生きた哲学者・王夫之（おう ふうし）は、**氣そのものを宇宙の根本的な実在**として位置づけました。

彼の立場は、単なる道家思想の延長ではありません。儒家、仏教、朱子学、実学などあらゆる思想を批判的に再解釈し、「氣一元論（きいちげんろん）」という独自の哲学体系を築き上げたのです。

▍明末清初の時代──混乱のなかに立った思想

王夫之は、明王朝末期から清王朝初期という激動の時代に生きました。

明の滅亡と満洲族による清の建国、戦乱と社会秩序の崩壊、民衆の苦悩と知識人の動揺──そうした歴史的混乱のなかで、王夫之は清への仕官を拒み、終生を学問に捧げました。

彼にとって思想とは、単なる理論ではなく、混乱した現実を再構築するための「根源の思想」でなければならなかったのです。

そしてその核心に据えられたのが、「氣こそが世界の根本である」という立場でした。

▍朱子学への批判──氣が理に先立つ

当時の主流思想であった朱子学は、宋代の朱熹によって確立されたもので、「理氣二元論」を基本としていました。つまり、宇宙の秩序としての「理」と、それを構成する素材としての「氣」とを区別する考え方です。

しかし王夫之はこれを、「理想と現実を乖離させる抽象論」にすぎないと厳しく批判しました。

「理は氣に先立つものではない。理とは、氣が動き変化するなかで現れる構造にすぎない」

王夫之にとって、「理」は最初から存在するものではなく、氣の運動の結果として現れる「派生物」にすぎなかったのです。

つまり、道、理、存在、時間、空間、自然、生命──あらゆるものの根底には「氣」があるという思想、これが「氣一元論」です。

▍氣の本質──凝集と散逸の動態

王夫之は、氣とは絶えず変化し続けるものだと考えました。

**「氣が凝集すれば“有”となり、氣が散逸すれば“無”となる」**

この考え方に基づけば、山も川も人間も、氣が一時的に凝集して「形」を取った存在にすぎません。

死とは氣の消滅ではなく、「分散」なのです。

氣はエネルギーであり、物質であり、構造であり、すべての存在と非存在を貫く“見えざる場”であると彼は捉えました。

この考え方は、現代の量子場理論やエネルギー場の概念に既に到達していたことになります。

▍「氣を生きる」思想──空間論への応用

王夫之の思想は、抽象的な宇宙論にとどまりません。  
氣が万物の本体であるならば、**人間の生も、空間の在り方も、すべて氣によって決まる**という帰結になります。

人は、星と同じように氣が凝縮したものであり、そして氣のなかに生きていて、これが「天地人一氣」という概念ということになります。  
場所は氣の集まり方で意味を変え、行為は氣の流れによって導かれることとなります。

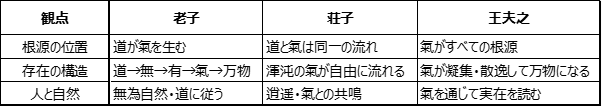
ここに、風水との接続が見えてきます。

* 王夫之の氣＝実在のすべて
* 風水の氣＝地形・方位・空間に流れる見えざる力  
  → 両者は、「氣を操作する」ではなく、「氣の在り方を読み取る」という点で一致

風水は、王夫之の思想を背景にすれば、単なる実用技術ではなく、氣の哲学を実際の空間に落とし込む“応用形而上学”となるのです。

▍老荘思想との違い──「道」か「氣」か、生成か実在か

最後に、王夫之と老荘思想の違いを整理しておきます。



老荘思想では、氣は宇宙の生成の一段階として語られましたが、王夫之は氣を「すべての出発点」として捉えました。前者は氣を“流れ”として、後者は氣を“実在”として捉えるという違いがあります。

しかし、いずれにしても共通しているのは、氣を単なる周辺的存在ではなく、宇宙の中心に据えていたという点です。

風水とは、まさにこの氣の中心性を空間に応用する思想であり、「氣を読み、氣を設計し、氣を生かす」ための方法論なのです。

▍氣の存在を再認識する

氣という概念は、古代の哲学者たちが宇宙の根源にまで遡って探究してきたほど、深遠な意味を持つものです。

そして私たち現代人も、「元気」「病気」「景気」「天気」など、日常的に「氣」に基づく言葉を自然に使っています。

つまり、氣の存在が、“あまりにも身近な存在で気にしていない”だけであって、“信じていない”わけではないのです。

以上が、王夫之による氣の哲学と、老荘思想との思想的対話でしたが、次節では、こうした氣の哲学を踏まえながら、「氣」という存在が現代の科学的・スピリチュアルな領域においてどのように捉え直されているかを探っていきます。